

【歳時記 お屠蘇（とそ）のこと】

屠蘇の「蘇」は、古代中国では悪魔のことです。屠蘇の「屠」はそれを退治するという意味で、屠蘇散は中国三国時代、魏の国の名医華陀が十数種の薬草を調合して、酒に浸して飲んだのが始まりと言われていました。古代中国の薬草の教科書でもある『本草綱目（ほんぞうこうもく）』では赤朮・桂心・防風・抜契・大黄・烏頭・赤小豆を挙げています。現在では猛毒の烏頭（トリカブトのことです）などは使わず、山椒・細辛・防風・肉桂・乾薑・白朮・桔梗などを用いるのが一般的です。健胃薬としての効能があり、初期の風邪にもよく効きます。邪気を屠り、魂を蘇らせることから「屠蘇」と名付けられ、「年の初めにこれを服するときは年中の災厄を避け、福寿を招く。」と伝えられています。

正月に屠蘇を呑む習慣は、中国では唐の時代に始まり、日本では平安時代（嵯峨天皇の御代弘仁年間、唐の博士蘇明が和唐使として訪れた際）からと言われています。宮中では、一献目に屠蘇、二献目に白散、三献目は度嶂散を一献ずつ呑むのが決まりでした（「屠白散」と称する霊薬を天皇四方拝の儀式に献上したのが始まりといわれています）。貴族は屠蘇か白散のいずれかを用いており、後の室町幕府は白散を、江戸幕府は屠蘇を用いていました。この儀礼はやがて庶民の間にも伝わるようになり、医者が薬代の返礼にと屠蘇散を配るようになっていきました。現在でも、薬店が年末の景品に屠蘇散を配る習慣として残っています。以後、人々はこれに倣って一年間の健康を祈念する縁起行事として、お正月に屠蘇酒で新年を祝うようになりました。基本的には関西以西の西日本に限られた風習であり、他の地方では、単に正月に飲む祝い酒（もちろん屠蘇散は入っていないただの日本酒）のことを「御屠蘇」と称している場合もかなり多いようです。

私たちのクリニックでも、少量ですが屠蘇散をお分けしたいと思います。大晦日の夜、中袋より屠蘇散を取り出し、180ml（約1合）のお酒に一夜冷たく浸しておき元旦、雑煮を祝う前に年少者より順次、新年の縁起と長寿を祈念してお召し上がりください。